

冊數	番號	部門
一	三	四

南江輿地志畧

五

近江輿地志畧卷之十二

膳所 寒川辰清輯

志賀郡矣七

一

一 薩摩 金堂のたうけう壇のうカヌ守者う臣里人をすぢう辱す

四才三分改めまくすう慶長七年四月大日照高院造隆の御請

松木清持とア桑妻はおおに白へんとくもうちほくこひへとく

佐元より一元より年のタヌニモホトニキホドトヨリ月日数十二日

の数二十日め数九四三部羅及ニ井の二より月日との二つとく

都合あやう元のをう月と算く日足の二入を車とし

月と六百八とほくじみと升るの意とのをし善後院の道の境



廿五年と申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の数合と申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。大内入るに九十七四年正月の日も申すと百八十八娘肥の頃りの事也。

开きよる縁より外と申するハ娘肥の事也。日と接する由く、之を又云役石心つ接する事も元よりくゆらうや

一唐寺門

金手の正面より金手の裏へいわ

一三層塔

座すつての外の東面の角の上にその前は像をもとめん。塔の上に文殊普賢各坐す。下方塔身を大和國山城守より貢す。左

一村の橋

門ある。其事一町もうちす。其は紀福保田庄也。つあ

有一橋名村橋古傳おほて。一日墨祖大り。自北領至過古橋上。偶遇仰西矣記在于大師。度知大唐青龍寺羅於宋大橋上。結誦大縛制。止印明西向。僅是水時。橋下雲霧。旋起堯揚雲空。が時曰大己。減等傍人不信。翌年彼寺致書於師曰去。肯告

寺患灾火至危急時油雲卒起大雨芳降烟火自滅院宇幸
晚う書中詳祿其時利正當清水之時以此橋上為青龍天
台等庄辨之所

一青龍院 唐院の都内より今となへて河院の所す於傍正
良意和尚所創也和尚越前守若原良徳の子大仰言行成之孫
第二之別尚也初會達入唐歸朝之後徵效寫大唐國青龍寺造
五一院安置唐朝傳來經書大師因而不及重建院宇而遂止
垂堀川院永德初年和尚挺大師素意送青龍院以為天王別
師願寺勅置告阿闍梨云

一立所明神社 門前西之行事二所津二廊内八所明神と並立小
ち立所明神南を八所明神也貞觀二年夏祖大師新羅並山王の

祠を建旱く次々近に國名神立社と勧請し以寺内比禪ち神
トハ是と立所明神と名けく其立ツハ上比叡 建部 三上

矣主 比良 以上立社之主神はハ未く也新之せんを了畧之
一八所明神社 本是北岩大雲寺の住守ニ正曆四年九月十五日

慶祚大阿闍梨當寺より遣へ勅請し社と建例請毎年十日ヲ
其所とハ八幡 加茂 松尾 曰吉 春日 住吉 新羅

石座以上之八幡曰吉新羅比神傳惠別卷よりテノヒトが聲
を延喜式曰山城國愛宕郡加茂別尚雷神社祭主家誓曰下社一座而
祖健律之身命丹波の伊吉耶始上座別雷神是御祖之序條有
社祀曰下社二座天降日向襲之高子穗安神加茂健角身命丹
波國伊吉方夜口子之玉依比賣公事根元曰下鴨天御祖上川歲名

別雷也。御祖神者号玉依非加茂健角身命之女也。或時逍遙覧
小川道有丹塗矢自河上流下。未至玉依非塗矢未屋上頂之有身遂
生皇子不知其父為誰也。一日擇聚里人設宴授益於皇子曰此益
可與汝父時擲益於虛空。踏破家屋曰我是天神之子也。飛而上天
是則別雷神也。真丹塗矢者今松尾神是也。社傳曰。ア社神武天
皇上社瘦。杆尊是也。社最和。傳曰。加茂男神而為陰伊勢女神
而為陽云。松尾之延喜。或曰山城國葛野郡松尾神社。掌主家記皆
在山也。國葛野郡所祭之神二座。大山亦神。杆嶋姬命公事根元曰
大宝元年。麥都理始建社而祭之。此神乃大山咋神即是與比叡神
為一体也。智證宣隱曰。承和十三年冬十月和尚為上朔聖女下鎮
卒土於松尾明神社。以發誓願曰。願我每年五月八日十月八日於比叡

山明神社頑講演法。念佛名。各大乘經以為一生之事。身於彼社。持
旛講事。春日之延喜式曰。大和國儒上郡春日神社。二座公事根
元曰。春日四所大祠神武雷神。奇主命。天津兒。產根。命姬大神也。右座六
北石藏。大雲寺。根木の襖守。之延喜。中院也。北の院。傳つて行之。
新羅社。少院の西門。内二町。津西。又曰く。社。新羅。房南。住吉。社。之代表外
新羅の馬鹿之。西門の差入。也。俗新羅。房南。住吉。社。之代表外
の坊。西上總社。の前。南。新羅。房南。住吉。社。之代表外
之。鳥居。前。西上總社。の前。南。新羅。房南。住吉。社。之代表外
の坊。西上總社。の前。南。新羅。房南。住吉。社。之代表外
入の社。以代西上總社。の前。南。又橋門。を。ひく。の前。方木。と。立。左右
陽龜。也。社。ある。柱皮。青。三間。神像。も。人。三十。室。化天師。の如

此新羅明神名異その神」とすつは記傳俗曰新羅大神、も素
聖焉鳥本身文殊大士之神神用新羅主通の國神文德天皇天
子二年裏祖大師大唐の朝時衛護大師東渡清和天皇貞觀
元年春在千如曰二年春大師建祠裔祭門十七年天皇詔大師
大隆神祠一條流也德三年春慶祚大而闕顛改祠易方堂身
聞古社東向寔々社而有者以て而致則必受祠慶祿社
と有令移之後更吳内公之於度紀曰新竹主延於木
炭寺立於三枚移於一流曰祀在於故大友氏教世神職依明
神之告也云ト部兼邦、和歌の注曰の神を玉京菩薩化現
ノモトアシトナリトトカレシケリムリモトト
アシルトガ神也御くひすれくもあを新羅もと御てそ

御すまよよよよよよとりけよもろのをも見よと多くて
わゆる時子とあはれとこそ諸神以降恐うれをぬい多
大師入唐とすと新羅もとさう一叶の葉の聲とてゆくれ
たかしはしてかに法擁護の神とひくは、佛也とひくも
上記してかくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
新羅の神伊弉册子素戔鳴尊也一叶父母ニ神麁も住於根因
乎奉勅以上於天與日神相見而後師真子立十猛神降到於新羅
國居萬戸茂梨之處尔來經年久矣苦文德天皇屏宇仁寿天安
之間暫達大師入大唐尋清益事者數回功業已成唐宣宗
大中十二年六月八日後海東歸日十八日而別一素船現船中告大師
言我是新羅國神我將護師之教法乞於慈氏下生之日言已竟

日元二日風航到善化寺志左寧府船中神自呼言新羅志神今因
予新羅大殿神而已一書曰往昔素王多鳴鶯折入海中為婆竭
羅王王第三子化海內異教既而坐現震旦國為嵩高山寺神名
曰朱山王又号松嶽王或現天台等名山美色而利群生爰号仁
寿天安之間智證大師遊孚唐地其國大中九年大師登臺
寺山詣朱山王廟有化出者師仰見立首載于秋霜丸宇札
錫杖右手持黃毫告言我昔号無歲如來送五百座頭劫令
現文殊師利菩薩在北所今復乘波授護師之教法語已形
德大師不堪克躍念涌拜祀而去其後求法事竟十二年六月
八日乘國高李延百子之舶歸朝日丈日而刻素盤右記酒口
告曰我至新羅固神也。因曰因就院序于天祿二年七月立

日有初新羅神叙正四伍上後令崇院所宇永崇寧年九月頃
勅加三位。元亨釋書曰新羅昭神者天安二年曰珍波舶
自唐歸洋中忽有光若沉船曰我是新羅志之神護護
持師教法至慈氏下生語已不見移入京恃信秉教務亂尚
書荀時海上翁來曰此所不堪置經書是日城中有一勝地我
已先相攸師用官建院宇度此典籍我鎮加護又伊法王法
之治且也佛法若惠王法亦惠法也形德珍波處山至山王院
山王明神現形曰傳來徑書宣威始起新羅明神又出曰壯地
世少有靈爭不可過也南行數里是為佛所珍乃于新羅山王二
神及二比丘到達貨郎固母寺寺僧侍洗寺事既而山王迴
上廟宇新羅明神詔珍曰我卜居寺之北而時百千眷屬修未

圓繞唯珍獨見他人人不知於是又有參與人儀衛是多以夫膳
廄食新羅放待未賀而後來與人形匿不見珍向明神祝與者
為誰新羅曰三尾明也自是新羅明神威靈益顯う、神社名曰
新羅明神者三井寺領守也俗曰珍自唐還時充氣於駁船中曰
我是新羅之神也珍歸後入三井寺守え、社傳云新羅明神
本地文殊童丘素面鳥尊也え、ト極きわト部蒙もん、流な
ふとさい一輪高流也え、アツシ神道じんとうを奉まつト御ご佛奴ぶつぬ
リカウラトアツシ神代卷じんじまき素面鳥尊新羅毛も陳てんありて
後母ごぼ而出雲國敷ひらの川上鳥上の峯みねより其そ門もんと有舍
トアツシ新羅神じんらじんと素面鳥尊もん仰あおせり地獄じごく追おれる林はやとは
號あ新羅じんら根ねの園えんとは西小出こし曉あれ北出雲國はくしゆうねなととモモシシ

此言こと谷主たにぬしとよより地獄じごく天あめ元もと極きわ金かな化か元もと活なててア
冥めい端ばん夷い正ま備び之の祀まつセり又また素面鳥尊もんと行ゆきゆててア
立た逐たの流な海うみ奇きありも巻まきととりん又また新羅じんらの神じんと和わ音おと神じんともう
事こと素面鳥尊もんととりりああししわ音おとの口くちの傍そば吳邦ごぽう赤山
の神じんの山さんととてて不ふ可か能のう也や、彼かれとと故ゆゑの神じんととの如ごとく
也や、言こと奇き怪べとと人ひと發は章しやう伏ふ、

鹿しか船ふねのうすうすととううききりりよよととすすけけりり
此神じん比ひ和わ音おと也やとと或ある新羅じんら法ほう事じのの故ゆゑ之の龜かめ立た比ひ快かい竟きよう新
羅じんら之の初はじ故ゆゑ仙せん也や後あと故ゆゑ送お集しゆ事じ、その如ごとく

嘉安二年八月廿日詔令の内判考うちばんこうとと後あと

伊豫守源丸義甚當社と尊崇しニ第一義光と云新羅の主人とな
新羅之高祖と号し所賜新羅源氏の祖也。武田少主厚佐亦号
其後胤塗泉也。永泰七年九月十九日因滿院前大僧正行持始て新
羅の奉礼と行ふ尔未曰例より人をもねし國ゆす多々皆磨意
三年丁巳將軍清舟無事こそ多氏の考文引後記ト

寄進新羅社

近江國葉津別保地頒載事

石當社昔在去外國棄夷之域遙本朝君子之州以来明德克于
千古冥祐被千万邦就中景祖預州大守專抽吸心厚蒙盡瞻
幸黎珉秀駿戎狄卒服寄進之義趣如伴

征夷大將軍正三位行權大納源朝尊氏刊

曆應五年四月二日

義詮文

寄進 新羅社

近江國葉津別保四ヶ庄事

右任曆應五年四月二日所寄附以寄當知行云
此上早領掌不可有相違之狀如伴

徒一位原朝臣判

康安二年二月三十日

一ニ童子社 新羅社を殿りた右より東と移り童子西と高王童子
と寺記よりよし古昔の事より慶祚再興後今を般若高王
の二殿りと本殿の左より画多の神像とえども此般唐製外
く般若ハ赤衣高王ハ青衣夜半同く誓をあひ道と教へ倚胡
床座にニ神焉新羅以神の養て爲の神也と云

一大序子 新羅社を殿の西より寺門は紀補禰曰大序子ハ三井北
門の北也神焉又金國とアリ神像日本之衣冠也と
休まひにテ捕玉ノ社も唐在三年至利子氏公比仰再興之

一狮子岩 寺門は紀補深曰慶祚大阿闍梨改易神約前日伏地
法之法明阿闍梨以昔時山中樹神所棲大師金洞鈴杵埋於神
本處西切地中即爲地鎮主及阿闍梨善タ一頭狮子立入瑞雖中卧
鉢持上竟後更不得賤昇旦往而視之鉢持之所一怪石出現其
故狮子頭因梨為謂狮子者文殊大士乘數度是祥瑞也昂字
之名狮子石傳曰明神有時施戲于石上云

一序影松 社門の前庭より一根三株也貞觀初年明神勅
て三井ノ入る所也ゆき寺の北門也す寺と塔松止む松と御氣
の松或を三極の松と云

一序影川

一現在谷

新羅社の少の後也寺門は紀補而曰社久の後林の事

一多深溪松柏枝岸而生奇石高流而飞瀧水僅微東入大澗無
一塵境寂冥之地可謂壇中天地神峰高晨淳光於一河水僅四
於利生計遊戲之日神自喝言我事現在千代天松是神詣
谷名現在川名而景是三井隨一勝境也此令の心洛と曰く
一常在寺は境く新羅の社西上に若宮八幡の社うち不詳廟門有若宮
の南四十步堂今えり

一金光堂 千手堂は南より新羅の社より西面のものと有る之
より今ハ流走する保永義比三方新羅ニ即く支比建立之者記曰後
冷泉院の御山有延長安信貞任と長閑八洲大移逆意倒落天
皇勅武將源氏義為追討使往于東州賴義及延長之先詣新
羅祠捧願以願狀其詞曰若依神力果願念宣以我一子列于業
衆徒以教神恩云尚又約錦傍正行觀以祈求正事を難為不當強
欲神法力所か遂至原平七年貞任宗任一族盡亡誓降洛城
義曾禮以三男義光出家可教景誓然義光及志氣壯持暫度
施佈於是教義光惜具畧遂冠為新羅太神之氏人名曰新羅三
郎父乃謂義光曰後汝有子必酬是誓令其出家奉神既而
義光生數子即任父命令長男出家号元義以為三井寺住於
北院田地建立寺又造別室于廊内安置金色丈六弥陀寺号
金院割家領近江國甲賀郡柏木郷一所附佛科以元義而
開梨為住持といへり云々

一西連房 金光院は東新羅の社れぬれりとす祀よりれども
を云ひ毛伊裔も傳教義光の也男快拳阿國梨の寺と號寺

以東に治室あり而やと後大院内聖堂之系墓曰新羅三郎
猪努源外臣義忠嫡室相應天下美名お詔即位麻嶋冠者令討義
忠耳彼麻嶋ニ郎邊本意其夜馳向三才寺告其子知悉義光
相副書状以麻嶋二郎公忠送舍ノ事信而彼俗多掘設深土
穴而捕彼麻嶋を陸穴埋殺之テ是より迄有之

一住吉社 多ありた右陽難あり陽難の内四廊其内神殿四所
西に向て並立回廊南北瑞神殿の旁に池を有し社を龜山院の文
永立年の株前大傍正隆とす住吉四神大蛇神ヒ勢清了地の守
久遠と云ふ也と云ひ歎き志深一念多之

一龜山教待堂 住吉社れある之所を教待和尚の曰承之和生革
取龜鼈為饌其残骨と弃るが故に年より因く名けく寺門
傍祀御跡回到舊跡迷跡唯見龜鼈殘骨積如山近而視之皆
寒葛蓮之歿而無他積大衆於是始而歎異其積骨之所後遂日
有龜形亦似龜左口曰龜山號曰萬代兩千代をか佐林天見ゆる
武龜の名多數有之其名利尔々に拵も多之此故資業之致也
後移迄集其身

一 聖堂
老秋浦草

俊成

乙女子君のよきを乞ひ其代りのうそ拂へん

秀容名所集

富隆

物語不代往乞きを乞ひ其の下落を知りて凡前まこと

詩本集

俊成

一 聖堂
鬼屋名所集

鬼屋

一龜鳴榜 石坐の傍れ小榜をすうは記補説曰坐處有龜髮一小
榜侍奉食龜髮已投殘骨於流其骨忽墮為群龜榜下遂而鳴
因以榜名龜焉

一舊頂堂 龜峯の西上桂木はノ乃す竟也此院後河法堂
沖灌源の師大傳公頭の國梨の寺とへうたる

一尊日生王堂 や竟院の西廊には三院の門よりとへうたる
御記補説曰白ら虎清す嘉慶四年は醫赤傍正奈園花陰に創三
種金子少虎甲比号羅立院如意金輪才才者是王善薩汝今上御死也

年妹八月九日勅金阿周利三口立後永保元年堂宇回祿班河
院寛治四年白河上皇典侵羅立院は置り國梨五口又在二十龍
羣坐供養ふく侍教文大江画虎草之事わざさを畧之

一灌頂堂 羅立院の西南谷とへたくま叶洋龜院の門あり
けむと前大傳正の寺の師賀延河國梨之剣もとより今を
ね

一安樂行堂 南面あり門を塞て左左葉垣せん丸代のあらず
けり此堂を善叟善藏の跡也は和木と貞觀七年大师建
之畠縁起曰後朱雀院も唐四年十月九日閏白左大臣松浦公之家
室造立金色之六面除危如來一尊多身身之觀音像各一尊安主
道傷又寺内全字妙法蓮花經一部以遂供奉云々技术木暮元所
載亦ゆけんとす言ふ不贊止まつほ記補説曰傳度朱雀院と舊
四年十月吉日大今年政元月長久元年是則奉行堂傳度の年
月又圓白左大臣松浦公之家室多字治國白小政所と金版之代易興

常行堂供養の年月是日願主示曰今傳疑是奉行堂供養の祀
欲況又安樂行堂久普賢道場也除陀訖音耶尊似不相應奉事行
堂を念佛三昧道場也ニ聖安主を合方を知今傳事行堂供養
記也特、長寧以事行堂為安樂行是名延至遼寧之歟

一肩井谷　専門の豆入車

一玉室社　少向参拜數あり

一十八大神殿　少向参拜數及多向參拜記神跡曰十八大
神是護伽藍神、西坐寒旦法國佛堂傍院中立神廟而
奉正季、南寺法座を貞記十七年墨祖大師始立神廟以為寺院
落成、十八神名出七佛經一更音二梵音三天鼓四難妙立
一觀音六摩妙七雷音八師子九妙數十梵師十一人音十二佛

奴十三妙德十四度月十五妙眼十六徹聽十七徹視十八遍現云
此中伊勢日吉八幡加茂住吉春日平野松尾石上香取原
仁文丹生兵主等の諸神、祀あり泥河とも内金の泥河とも
ト溝く秋、武安院田仰、加茂、五所、中國、伊勢皆立鬼廟
皆舊記曰即鬼子母神也　登立伽藍神殿後記曰十八　人或曰神、十八明神
トシノ神呼れの神、吉日也の神焉也、西之北峯の神と名
神大神と云是莫域の神也、四神と云へて、北峯の神也と名
一昂大八神と人皆号とひて不取手の廟也、而て三帝神と名
トシノ人不寫と云神を護伽藍の神也、事と教人言と云、暨後
モ一昂大八神、而て北峯廟也、而て北峯神殿と云、暨後
背負之うしにそひて守れ謂い肩井津ゆき、壹ヒタチヒツヒ

え大主は、寺塔今ハ心向の明神、又門ノ雪行事ニテ汗
ツメテ大歎テ、天主主主御の内、在ルノ事也。橋上從大
政の而後、後院の西上

一初子院 三井廻の子主

一不動堂

勅主院の西上右位院の内ニ門も、智樂門佛也

第子院北室の岡梨の不動、本尊ハ世ノ所謂注不動尊也。まつ
伊祖神流曰、某伍沈氏祖北室以岡梨寺也。内傳是寺子也。寺有威
怒王也。正空半飯之父師興也。於重病今在旦夕空疏。明王之前
新清曰、我今欲奪代師命成。子願望投身辭礼仰視。子條苦
相現。西血浸徐雙眼而滴。心上應時興病即愈。空亦免。正。明王
浸痕至後尚在也。是号位不動尊遂搆一堂于常住院廊内

安置。件尊像。且後花王院傍。免印岡梨亦飯位不動尊傍
於寺内無水。奉以爰鉢。以誓祈明王。一夜庭上深水甚。涌出
之不渴。傳都國臺之役改易寺号。曰法泉坊。故老傳曰昔時
法泉坊ハ南院院の名。御寺也。寺佐院六琴尾谷。中古寺
文易に今此法泉院ハ元書行院也。井ノ左即花の方の堤也。

門也云

一立大堂

御主院の御大殿也。以て法輪院也。其院ノ前大

僧正竟猷。因禪修也。之寺也

一灌頂堂

御主院の西上大堂也。内有大佛也。真日院

因禪修也。之寺也

御堂院社也

一 紫尾明神社也

一 紫玉毛神社也

一 紫毛神社也

一 紫毛神社也

一 紫毛神社也

一 紫毛神社也

一 紫毛神社也

一 紫毛神社也

近江輿地志畧卷之十三

新田郡
志賀郡

一三尾明神社

赤尾虎の西すゝ内社及東のアラモチノリノ居
の内石防ヒ全木ノ構門あり神殿面向柱皮葺三間丸太透廊寺
つ供祀碑揮曰三尾少神ハ往昔伊弉諾尊童丘於此地遂為坐矣
南虎主神其神事差三腰帶色赤白玉具形似或三尾因尾因
名三尾明神或以三腰帶化為三神一曰赤尾神二曰白尾神
三曰黑尾神已而三神分現三所訖中以赤尾為本神之然其本神
考今古無座無人知其初山王也白尾神云武天皇大室年中現

今地稻井也里三尾神之称德天皇之神陵景雲三年三月十四日志賀

浦見立色波時有一翁曳黑越茅踏波水東來又有一翁姜赤腰

常自西山而下而翁往徑舍庭中歎詣有時而後敢造土俗造一祠

于其所以祭焉号黑尾祠

地曰
原

貞觀元年春大師以新羅王

二神始入常寺于時有乘輿人食新羅神賀其餘座又謂大師

曰我在此久俟師已久可自今已後擁護師之故法言匝而去師固

數新羅神言七等地主三尾明神也師聞此言後復興是祠摸刻

神像安於其中而未有寺門籠護三神幸威崇矣瑞威西砌

有白山明神祠此即三尾神現加賀國号白山權現彼以一体分身

神因亦有祭于新正立、奉禮每年三月二ノ开講說月次十四

日也社ノ奉以勝々後漢有匡國志略、常社以神社の神藏

佐氏亦有以奉氏達綿々相傳之者也神祀曰兩尾也

天照太神普賢黑尾也新羅州神文殊白尾也白山權現十一面

合号三尾大明神三尾社曰秦國村之祀曰三尾有神号三尾明神名

神宮社此當寺三尾同神異未詳之或人詣余曰高嶋郡三尾道明

二傍始作名答寺觀音像其主堂伐近江國高嶋郡三尾崎流岡

漂到于大津波時松木上有三小蛇忽然冒出上陸望西山而走是

則三井三尾明神也云々余據之於古記中有相似之太神祀三尾

緣起下曰吉德說云一時湖水有立色波其中白色大波止大津寅

謂真止所今名大波上又曰壽嶋彼中三尾少蛇有之即是壽明神也

如今說旨趣多以似同者越之者養老年高嶋三尾移于此地元

云々今持之者高嶋也三尾八猿田彥命有ノ回車祀之云々

社ノ元伊勢諾尊伊勢冊尊歿化すとされハ別神國事吟
三代ニ謀云貞觀四年四月廿七日戊子近江正土佐下三尾明神
役四位下

一白山權現社 三尾の社のひの方より神社三尾丸茅下
ヨレモ

一三尾歌鶴石 三尾社を兵庫の御みの隣に一整石ナリ
まつ白蛇補源曰相名云有時三神合參必座此石ノ名焉

一琴尾谷 三尾社の南一町洋小流東へ至りて左に琴尾谷
有社あり也曰琴尾谷前至溪水源ニ流る天人每降其處或
浴河水或奏絲竹遙遊慰神因以名焉後人復役神号改緒為尾
曰琴尾谷

一花谷

一花王院 三尾西の上花の谷の山脚より廊内灌頂堂と達フ
一法泉水花王院又曰院主慈和院梨本傳燒の泣不動寺ア
一研て法泉坊と云事書傳燒之跡モハ第ト津之口
一平手谷

一正法寺 法泉院の西一町北上より路至死寺とソ
後正法寺ニ改じや堂あらか朱金色等此如意輪觀音也ニ
大寺寺號達大師ル作或ハ大慶傳本の至像となりや堂の底
あるあり文の十三年瑞應寺と云て今此寺と改モテ此寺之後ニキ
寺ニ替シ此れ觀音寺と云毛利元就之子義廉之子義安

傍は良里田の邊にありて是を御水の物と大は町
勝下りと景を居す。少礼の事、金罰及使と云ふ者
は多き。

一不動堂 正法く凡ても勿動明王の像も是天子す。寶羅
大师の作文明十三年の事。
一地藏堂 正法まゝ異内ねの事より地藏菩薩の像也。
一土人武才宣教化や

一天神社 正法寺の塔内より不空蓋亞相の宝慶七年
一達之。

一筒井各 復門の事入申置ゆるの日本ノ事。山脚まで有
一筒井モ又大井を陽て东の方を下筒井と名シ。

一淨の尾 淨の尾も今は傳々下筒井淨の々穿りしに付
テ。淨の或い淨め。心も筒井淨め。ハ今舍れても後で有り
一すほりて於て平家の軍勢と敵ひそゑ。事を聖惠記。又
トウタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ
一万日護摩寺。復つて中面されと名シ。

一れ豪四房 万日護摩寺よりいつても御も更お房れ
豪ひ國梨の房跡。れ豪。事も。房の村の事也。

一稻荷社 蔽摩寺の。あ林を傷て。社を向む。數もあれ
清和天皇貞觀十七年天皇勅命。院門。達之。也。其當
一從至松尾稻荷山王彦田多吉等。也。護大師事代院。の。此
一神出。也。之。大佛。即國町の西。下。原園の傍。此

と神事と里事も事を新日吉氏修ト至

一新日吉社 稲荷社のありて是と並ぶ社とすを社
車向御飯石表は後冷泉流傳は天永二年命大祭に祭
一社山玉柱院と宝幕と勅請 神事とおもとてて有
主官と役人同く社とゆき御事と云ふ也とて神事と
多礼每年五月一日お祭り社と十二廊とて御持社
建武二年の參入と號と號をん而後モ此代と云れ
四社の代へ不詳

一小國社 お江新日吉社のありて立を所のやへと山母國
小村御れ尊と子孫の本山とて山同とお坂の國玉
ノノ高を小高とばんとよへと奉事あゆたとよひせうじよひ

室小室と花御とよちハ北山に在る事へ原え行馬遼紀日のモ
一河至れより、三のうちをとくと小國をちぬく太陽の神とす
一社とち、六所の神と、多御の日也とてアヒト
一麻園 大津北國山の西神山の傍、大津の又配西傍と云
一社と麻之木と云後麻園の事と改シと云公事根元と麻の字
とセテと改セアリ

一社 いわくもうすはははりせらむとねねり
春日山神社

一社 庵修トウラセテのと正月もとをすくはやのま
西行とす

一社 かづくさとせきみけひとすせきとすくはやのま

皆庵とさせらるゝ故其れ甚矣と新總角をさせんと
モト新とを下と割に

一庄巖も 神少より三井の畠田と社伴古ハ三井さんと祀ふ
トシのそつて行風のそとくと席六原あそば職室ますの支
配所がちんと立石三井土千石の因ニ毎年二ま役者ニ三井の
信使立石身へ送る

一三井即旅新 新宮既南より周囲築垣中央に社有車勿
前マ多忙なり拝のあち小圓越く

一立別所 許謂尾瀬を近松寺側ゆ事多くお記し也

一近松寺 囲山比立近松庵北微りてニテモアシノ井比立方
とのてこそ近松ハ西山より而世夫を擣シハ尾庵寺陽

東林原山ゆきひ立門と立布寺山と背東立木達うう比
寺内見付有き多く三井近松比畠田とかも立冬守アキレ親
ちれ像立庵大師立到之仰ムソ教給教誨行教化法記金舎モ
立れ立れを近松も立くとツツツ立化立くと人皆
立金舎と立近松寺の邊の字は留子立御立御立御立御立
東立め

一如来寺 近松寺は山の間は檀金凡ての伊之代は家
主立のゆきと一ゆとよ西國天皇此こそ佛と要らえ
立金舎と立多く立久松原信立とあすニキと立日一寸
八分の佛半分と割ともと立金舎の立立立立立立立立
の半佛半佛と立と割と立立立立立立立立立立立立立

一獨鉢水　　印堂のあはぢの社の後重ねてすりもあら
わあれ独鉢水也

一安然和尚塔

雨のあと山上より重なる爲めは山と大比の

先惠と名はけ者大师の墓碑とも併え享被書きありあま
一安忍和尚は行れず即入滅の地く和尚は立至大师の寺宇亦景
ト修正道崎くましく教ニシテの祕奥と窓の如く更に黒い霧
と陰翳に遂に教的同善と云へ一時一佛比一教と云々如
來比大教と判神ト大いに台意八門と号した先達天皇元慶八年
勅して元慶寺の開創者とし後遂に来住于此いた國山の東
と稱ひ旦三井の幽寂ともす後遂に来住于此いた國山の東
遍記してさへありてゆきは後從之宗のあり一日ノ駕籠ノ禍

一結とひ岩のひとりの岩石に開ケ水急く傍流碧水は深
渠を夏不渴せぬの臺本より傍よりと伏れども生漏令
一所一弊とも云ひ乍ん入滅は後モ遠者と云ふ矣
又モ高野と號してと近松也と云ふ也

一郎等像

近松の西の坂平坦に在れどどうも像有る

臣武天皇平安朝之都と並んで八人の王侯と東山北山と西
山と號すが、將軍源氏と云ふ所又萬人と云ふ所と即等像
一尾藏寺　近松の本敵妙寺の事とある廟比小町と云
く車の方八幡主の馬也と云ふがまたもやう十面火多主像
其子大帝也と云ふ度神太白圓鏡石刻也是實至佛と云

もむすとて都鄙を走る道俗陽神はまごぬまと並陽群と
移はれ還俗素の哉くま主お軋ともばへ破れ本ハ既くもめの俗固く
佛主事く波隣禮之の祝もとよみゆく皇脱の祝もとよ
一慶祿場 庾藏もより一傍既に唐軍年號八月代性も度々
凡争ふと至る事也此の右門お事に祿施と安宅の大モモニ避
く不貴トと固也ト遷り尾藏也比詮セカヒト機上於至員也未
一群集に示三井瀧役比中等より永曆三年四月後也而は固
体もと辛く尾藏辛ヒ詮セカヒト機上於至員也未
ト乞祿、法王ナリト謂つて御ノ新寵也。舊記云新紀聖高
記元吉祚也未モアスカヒト
一萬言八情宮 石比階比廟の方ナリモドリ。俗一町は東

多義門八情宮ニシテ鷲尾の八情主と名レ後令氣流比康平章
伊藤ち村武助は西蓮坊快至以因ホリと稱く。一初モ尾藏也未
廊内ニ達ク、又居水八情大神を勤修ヒコ内ニ日未歎未父子
所く坐れヒ行ふ。家人之僕一ト流馬と近ク。也後源氏代
三多喜く大いヒ神主ト仕ヒ。社記曰鷲尾八情主也源氏代
勤修山神固正八情快至阿周梨遼在也新八情宮を復修年條
尊武移長北國出陣之以過焉。社馬也前干以一鷲飛来而上旗旌
上將軍見之感喜向僧人曰以過八情宮宇言曰有社矣移長北國
新八情宮將軍同之抜取併鷲尾一枚即納新八情宮而復去向
北道屏陣之後造宮神祠奉祀神像改名曰鷲尾八情宮ニ神
像二軀。座像一軀。先翁尤工美卷。と為奉手圍扇と化ラ。旁金ム

折モ一寸未収紙船ル車酒一斗像一軀甲冑と常一弓矢とねもモ
尺二寸五分の奉納ニ

一微妙寺 園山の少へきん庭をもの西を寺廊の西門と東く
有モある十一面觀音也三玄を教説の開基慶祐中興也

一薦師堂 草庵をさばく西よりいき草庵らむ再び大寺
五七十二神持行列をも度社大法園利主中興をも善く薦師
如來を送賀する宝佛也と

一千九百觀音 本を如きもかわすとすとすと

一圓王寺 やす石碑勅使像を造立せ之

一水觀寺 中虎大門の下流のやま河也堂あるやち十一面觀音
此三像共御天王寺

一薦師堂 本堂以東南より有るむす彦也とえあも後承

舊庵跡とも冬元年因園院寺之僧西行も亦東也

一常在寺 在少虎之山也とる年も修りゆる界平師而从跡川
院仕才く僧アキラ近羅社の多益の小門をはきて寺事ある事
すを称也

一經跡於院社

古モ此寺の跡あり社ある多益ノ根南社
平多益而大僧正行也。以園梨の達ミニ井代驛道の空刺也
大僧正代推料勘と好一景祖大師の送致を追々奉事焉其母の傳
媛と攀縫室三山れ幽深とあら若代寺勘安所不為永久單
道三山第二代檢校もめり又傍くをすの貴主も補せても自是も
發休和し又先年と遠くを西料勘之行ひ主と仰て曰國産

西山ニシテ其也ニ御ひる事御事御一社トニ主釋也
伊佐田市之子傳ニ神祖と遠くニ所植院と傳傳トニ其事
ニヨリ平川ノ事也又ノ院川又名ノ院川ト

一院川

一早尾明神社

立書在る栗三山日吉七社の早尾明神
有里說、早尾明神を立山本祖母はちの神也今もよほ存す
事不詳傳後田本代不動田王ことソア神初のあつ御傳言也
大代ヒ西少く漢ノル本院ノ入江關多々曰不動川奉祀年有
トナヨリ古記曰立木福也のむち、三尾早尾主と云傳曰早尾主松神
早尾高倉早緒後改名尾或說曰早尾主莫布神也大說示
立船神れど土俗早尾と音クリウエト

一不動川

一千石岩

立早尾神初の後太昌之ニテ十二丈一圍三十尺又丈
或曰大明神數百立平淺と云一升と云三十升と云一沟也
又云一石と云此石のさう千石たゞれと云事にて十萬石を万九
千石と云之れと云是也千石と云事にてと云事也
名と初ちり名ゆの相と云へか傳曰主に千石と云れ
某早尾島主氏而ト云千石也云也海と山と云もと云
て太も大石と

一千石岩の池

土俗或云大船少船の代より云

一島帽子岩

一児岩　皆生をよの頃よりも亂の御もと歎き

一蓑谷　是千石鬼石右へ河津とまちむし山に御の安

一如寺　是モタヒルニシテアリ也と號すと云ふ所正

トヨモ土佐ある事云う往來大伽藍也とニキハ神社
佛塔を立とあくとすり御高の通とて樹つ比滝の上と平
か、北川三井の海され帝下北四縣より東西ニナニの許と號す
三井の御成りと云ふ也と號すと云ふ也と御高と云ふ
カハ育後裔あらうへと吉田より御成りて四五と
も就唯とおと草の御成りて四姫の東二門そりと龍王の御成り
王の御成り御成りと御高の御成りと御高の御成り

一あ賀山哉

一如寺越　是三井もうち山体原谷の邊なり大はうも昇
ま里も昇り高き二里こも四地、左駕大河の船も下り
船引舟の袖すぢ、右向に比滝は下りきと如意の寺
を立とひまキ、右向の御の御とめと御半とれ樹つ比滝也
ハモレシ御とえ御の御とふくまとめ御もと御半とれ樹つ比滝也
の山林の事もやんと松邊が云もとめ御もとれ樹つ比滝也
あやと一がうたけとつれ、高御院山御もとめ御もとれ樹つ比滝也
後一條院の御もとれ樹つ比滝也と御院御也の記曰
瓦生山の西と淀とあらへとて瓦生すとや御の滝也と云
山す朝れ東の清く石橋ありえと車あやくた志貴比がし
南志貴ノ御也と云ふ事もあらふ瓦生が曰も御て山成

とて三井を以て山川を三井とすもとほんとす
如意取とすをめし取とすもとほんとほんとす
山川の山川とすもとほんとほんとほんとす

持てものいきとほんとほんとほんとほんとす

松玉本

李經

うちせたがまをもとす

捨置

そものを六度とけりもとす

ト達へ家家(王二集)

象陰

筋引れねだる人ふとす

毛根連りと毛根大わね連り毛根(毛根)に
いはとす故毛根(毛根)とせとせとせとせと
毛根(毛根)と毛根(毛根)とせとせとせとせと
毛根(毛根)と毛根(毛根)とせとせとせとせと
毛根(毛根)と毛根(毛根)とせとせとせとせと

とせとせとせとせとせとせとせとせとせと
三井の昔八百五十九年とすもとほんとほんと
ひとすく木ぬけりとえくらうりとすもとほんと

同滿院印門跡

六面各三升三印五列

聖護院印門跡

平石 東本聖護院傳

美相院印門跡

平石 東本美相院傳

一北嶽十二坊

佛地院百室

花光院百三室

降光院百石

喜見院八十石

慶喜院三十石

龍華院七十石

蓮劫院四百石

善喜院三百石

紅爐院一百石

正性院三十石

勝喜院三十石

二子林院三十石

立智院

喜喜院

宝喜院三十石

一中谷十四坊

尾觀院百石

日光院百石

書院百石

同持聖吉性眼元信常と画く
翁ゆと云佛の子と画ゆも右は眼の画
翁ゆと村名と書くも後此事とするをやりまれと
上の一石、え徳、色あり山水にて次の石を右を永留、

色こけらと因極の代用と云ふ佛像也

芝澤院百室

山号を追ひ称號く紅炉院遷慶院跡

焉たほの事勢田の傳下人やつともと

善法院百石此院と勝多院と是なるとしれ四間

の松竹仙山の名も枝葉も有佳院也

玉泉院百室

慈喜院三十石

中行院三十石

三光院三十石

自性院三十石

玉林院三十石

智增院主 貢東院主 善見院主

一乘院主 善光院主

一南峰十九坊

北林院主

因寧院主

李祚院主

勤學庵百云

金龍院百云

法昌院百云

宣成院三主

西泉院主

童華院三主

千乘院三主

玄惠院三主

布素院三主

直步院三主

於恭院三主

圓通院三主

正元院三主

万德院三主

聖林院主

大覺院三主

宗福院三主

聖林院主

日華院三主

日華院三主

聖林院主

尾藏院住古九十九坊

今後五坊

多善坊

蓬萊坊

降明坊

宝林坊

玄惠坊

惟明坊

微妙寺住古一百二十坊

今後五坊

玉衡坊

立性坊

多善坊

千陣坊

殊文坊

法松坊

近松寺住古一百二十六坊

今後五坊

東寧坊

定光坊

法松坊

昌光坊

光慈坊

法松坊

寺在了悟古六十八坊

今後五坊

日行坊

靜慈坊

威日坊

四首物

事実物

水戸寺住吉六十人切今作上物

竹林物

唯季物

松門物

竹林物

唯季物

松門物

毎年百石のヒカリを奉毛の木百本を手植にて護はる神へ
しあらん多く護はる神の傍りより廿月者い新羅の木百石を
ハ三ばまれ庭にてうらうらしてされり五萬石やすてあるまち辰
引り申引と一〇女人比年守てやうん圓城院有りうち新羅人會も
十月吉日を取引三日である大師満月

一三井古跡場

後來甚だ也廢以至竟實化爲御車と霍執

室地主と成相を連立すに事と定む延喜永保元年辛酉

育名古里高山川の之後是傳手と柳島と號被る有り

河原にて空室と告げたるか文保元年文保二年もと

川の為つ火とモテテ火を十代ち金瓦治義に年源在れ

改一院第二の皇子を生れもく通すり義久と号す年と

却くん三井も全多と稱す以年もとゆじ平主衡太将もと三

井もれち傍大國小國と称せば、柳島と號被るて経て也

其子も後承ぬえとの延武元年から數度の禍争ひ左平

紀主洋ユのひよがくは多國を殺す事あり、元離支もく

ましり

一三井十億金當主の者と奉

御車と號被る事

御車と號被る事

一三井十寺 金堂白楊

新羅夕鐘

龜兔曉霜

本尊普渡陀尼夜也

筍丹喬松

復法丹枫

五山十寺 球谷金童

童池寔内

蓋庭古鏡

正法桃源王

一三井晚鐘之近江金童の具一也詳々麗色聞の傳下され

一萬尾村 そを萬尾の傍より三井より妙音傳へま、萬

尾のあひ出とある姓耳、萬尾をもむらむる。まくとてうる

古事記より萬尾二年の山萬里のあじ神のじあり。仁和

萬尾をすよきとて、萬里の古れを萬尾を四萬年

六、七萬年をもれまつて、万の尾とて、ことせとてそぞり

玉手集、

猿人歌

ふ你のひ萬尾、萬尾の終身、
もとめられん、萬尾の玉内をもくらへん、のほのほの邊に、
萬尾へ三井寺の燈、日御碕、萬尾の土市翁園を、偏集と
萬尾との山峰の玉内へ、近江萬尾と記し、且、土市翁園下
しもそと事に

一萬尾道場

文治十六年、萬尾大山の寢墓也

あらぐれ

一善つ草

貞觀十五年、萬尾大山の寢墓也

一山田堂

是小夏道、りうち、萬尾大山の寢墓也、文元年

正面再興以、並院佛の石佛大石、形刻して、り、文元十二佛

正、面再興以、並院佛の石佛大石、形刻して、り、文元十二佛

のる佛子ノ堂よりニ所も又南西に移務今ミシ

玉近江の傍ナリ

此處の風氣は實に良き也

其の事は前記

